

中国 学力とゆとりの狭間で

信州大学高等教育研究センター講師 李敏

学力かゆとりか——ココちゃんママの悩み

中国にいる友人から悩み相談の長電話があった。娘さん、ココちゃんの小学校進学のことである。日本の大手メーカーに勤めている友人は現在故郷の蘇州に駐在中であるが、ココちゃんは九月から地元の小学校に進学した。中国は秋入学なので、ココちゃんは日本より半年間早く小学校に進学することができた。この半年間、ココちゃんが大きな成長を見せたものの、親子が学校のこと追われ、心身ともに疲れ果てたようだ。中国での教育は果たしてココちゃんの成長によいものなのかを疑問に思い、二〇一五年四月にもう一度日本の小学校に入り直すことを友人が考え始めたということだ。しかし、日本

の小学校に入る場合は、中国（蘇州）並みの教育が得られるかどうかとの不安がどうしても払拭できない。決断に迷った彼女は日本の小学校に通っている小学校二年生の娘を持つこの私にアドバイスを求めてきた。日本と中国の教育のどちらを取るかという問題は恐らく在日の中国人の多くが抱える悩みであろう。OECDが世界六五カ国・地域の一五歳を対象に実施している国際学習到達度調査（PISA）で、中国・上海市が読解力、数学、科学の全分野で二回連続で首位に輝いた。中国の小中学生の学力の高さを物語っている結果である。ところが、その輝かしい成績の裏には子ども幼い時から巻き込まれる熾烈な競争、剥奪された遊びの時間、蝕まれた健康等々の問題がある。グラウンドで汗を流し、

のびのびと成長する日本の小学生の姿を羨望の眼差しで見ている中国の親子がきつと少なくないだろう。かといって、日本の教育に同調することにも躊躇を感じさせられる。やはり中国人にとって、成功した教育には高い学力が欠かせないものだ。簡単に日中の教育の優劣をつけるのは事実上不可能に近い。

さて、友人のこの悩みだが、その核心は実は如何に学力とゆとりの両立を図るかにあるだろう。そもそも中国の子どもはどのように勉強するのか。小さい頃から懸命に勉学に励むのはなぜなのか。高い学力を得るためには必ず自由な成長を犠牲にしなければならないのか。言い換えれば、学力とゆとりの両立は本当に夢のまた夢なのか。以下では、日本の教育を念頭に置きながら、上記の疑問を解いてみる。

多忙な小学生——ココちゃんの日

中国の子どもの学習時間が長いことはすでに多くの国際比較調査で明らかにされた。やや古いデータではあるが、ベネッセ教育総合研究所が二〇〇六年に小学校五年生を対象に実施した国際比較調査によると、宿題、塾、家庭教師などの学習を含む「学校外での平日の学習時

間」は、東京の小学生在が一〇一分に対し、北京の小学生は一三二分だった（1）。実際ココちゃんは一年生にして、学校外の学習時間がこの調査の結果よりはるかに上回るものになっていた。

それでは、中国の子どもはどんなものを学習し、またいかにして勉強するのか。ココちゃんの日を追ってみよう（図1）。

朝七時に起こされたココちゃんは、英語のCDを聞きながら、身の回りの支度と朝食。七時五五分に親がココちゃんを学校まで送り、八時一五分に一日の授業が始まる。表1はココちゃんの一週間の時間割である。一年生の上半期とはいえ、数学と国語は毎日あり、英語の授業も週に三回行われる。一年の上半期だけで学ぶ漢字は二五五字に上り、数学も海外より内容が難しい。大量かつ難しい内容が中国の小学校教育の特徴と言われている。

一五時二〇分に一日の授業が終わり、ココちゃんは一五時四五分に家に着く。楽しいおやつ時間も束の間、一六時一五分からは机に向かい、宿題との長い戦いが幕を開けた。各科目の先生はその日の授業の様子、宿題の要求、小テストの結果などを親の携帯に送信し、子どもの学習の指導を親に促す。朗読、そろ盤の練習も含め、

の教育改革に乗り出した。ただ、いわゆる「素質教育」の中味は時代に伴い変容しつつある。

一九九〇年、当時の中国国家教育委員会(現教育部)と衛生部が学生の学習時間を厳しく制限する「学校衛生工作条例」を発表した(2)。学校内と学校外の両方を含む学生一日の学習時間に関して、小学生は六時間以内、中学生は八時間以内、大学生は一〇時間以内と規定している。また、「学校と教員がいかなる理由でもやり方でも、授業時間と宿題の量を増やしてはいけない」と強調した。二〇数年前の条例ではあるものの、今日も援用されている。ただ大学を除く教育の現場においては、その条例通りに学生の学習時間を管理する学校はほほほに等しい。

その中で、注目すべきは、政府の厳しい規定と監督があるため、学校内の学習時間が短縮されたのに対し、コントロールの利かない学校外の学習時間が急激に増加したことである。二〇〇九年北京大学中国社会科学調査センターが実施した「中国家庭動態追跡調査」によると、北京の小学生の毎日の学習時間は一二・七時間に達しているにもかかわらず、学校内の学習時間は前年度の七・六時間から五・九時間に短縮された(3)。学校内で対応

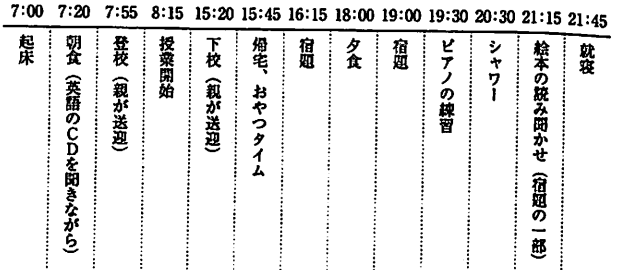


図1 ココちゃんの日

表1 ココちゃんの時間割 (小学校一年生上半期)

	時間	月	火	水	木	金	
午前	1	8:25-9:05	数学	国語	国語	国語	数学
	2	9:35-10:15	国語	数学	体育	数学	国語
	3	10:25-11:10	美術	体育	数学	英語	英語
午後	1	13:00-13:40	英語	美術	音楽	国語	音楽
	2	13:50-14:35	体育	国語	道徳	道徳	国語
	3	14:45-15:25				体育	

すべての宿題は親の見ましたというサインが要求される。子どもが宿題をしている間は親が隣でしきりに指導を行う。子どもの独立性の養成を心がけるココちゃんママは宿題の同伴はしないが、その代償としてココちゃんは長い宿題時間と小テストの少々悪い点数を覚悟しないといけない。まさに家族全員を巻き込む教育である。

一八時に食事をしてから再び宿題、一九時三十分からは一時間のピアノの練習。寝る前の三十分は楽しいはずの読み聞かせの時間だが、これも宿題の一環となっている。二一時四五分頃、ココちゃんはようやく寝床につく。このように、小学生になってから三か月しか経っていないものの、ココちゃんはずでに家族の中でもっとも多忙な人となった。負けず嫌いのココちゃんは頑張ってる毎日の学習をこなしているが、五三人のクラスで常に上位にいるのはけっして容易なことではない。意気消沈することも時々ある。

ピアノを除き、ココちゃんの日のように、大部分の中国の子どもがこのような日常を繰り返している。中国で小学生を持つ友人の大変さがひしひしと伝わってくる。

「素質教育」の実質——「ゆとり」か「授業1α」か

子どもの過重な学業負担を軽減するために、中国政府も弛まぬ努力をしてきた。一九九〇年代、日本の「ゆとり教育」の改革とほぼ同時に、中国政府は、学生の負担軽減のために、受験の合格のみを目指す「応試教育」を改め、子どもの人間性を育てようとする「素質教育」へ

しきれない部分は、学校外の塾、習い事、家庭教師、そして大量の宿題などで補われる。

近年唱えられている「素質教育」は、学習時間の削減よりも、幅広い趣味と教養の充実へと内容が変わりつつある。中国の教育は受動的な反復学習による知識の蓄積が多いかもしれないが、問題解決能力を重んじるPISA A型学力の養成も日々の教育の中に取り入れられている。例えば、ココちゃんのある日の国語の宿題は、「教科書を読んで、朝晩、太陽の位置から方向を求める方法を身に付けよう」という内容だった。

中国の子どもは大変であろうが、これ以上に大変なのは間違いなく親である。宿題の付き添い、学校・塾の送迎で大量の時間を費やすだけでなく、習い事で多額な金銭の支出も必須である。このように、子どものために懸命に働いてお金を稼ぎ、自分の欲望を極力抑え、自分の生活を犠牲にして、まるで子どもの奴隷になったような生活だ。このような親のことは、新しい造語で「孩奴」と呼ばれている。

なぜ頑張るのか——中国式「努力」の構造

それでは、なぜ政策的に授業内時間を削減しても授業

外時間が減らせないのか。中国の親子がここまで頑張るのはなぜなのか。実は中国の子どもたちは否応なく競争に巻き込まれているからだ。

他の国と比べ、中国人は「苦学」を通し、離開試験を突破することに対して特別な想いを抱いている。これはいうならば中国で一三〇〇年も続いた科挙試験の伝統である。北宋の真宗趙恒(九六八—一〇二二)が「書中自有黄金屋、書中自有顏如玉」との「勸学詩」を詠い、苦学さえすれば、豪邸と美人妻を手に入れられると世に学問することを勧めた。たしかにこの詩の通り、科挙制度が一般民衆に社会的上昇移動の機会を提供していた。そのため、教育を通して「立身出世」を実現するとの「教育神話」は古くから中国人の意識に深く根差している。学校教育制度の近代化を遂げた今日においても、試験を通して人材選抜を行う制度が衰退することなく、依然として社会的上昇移動のもつとも確実な手段となっている。このような「教育神話」に対する強い信仰が今日中国の激しい受験競争を引き起こした深層的原因だと言える。

一方、中国の教育システムは受験競争を一層加熱している。中国では中学卒業試験の成績に基づき、中卒者は

背負っている。その使命を果たすためには、学校でコツコツ勉強し、厳しい選抜試験を次々と突破するしかない。これは政府がゆとり教育を強力に推進しようとしてもなかなか奏功できない根本的な原因である。逆に現在の「素質教育」は、その責任の一部を学校という公的責任主体から、家庭という私的主体の手に転嫁してしまうことになる。学校教育の成果についても、家庭の教育力と経済力に委ねている。かくして、選抜制度の抜本的改革を伴わない「学生の負担軽減」改革は、教育の私事化と階層間格差の拡大をもたらしかねない。

この意味では、ココちゃんはとても恵まれている方だ。両親はいずれも修士学歴を持つ中産階級で、ココちゃんの教育にかかる財力もあれば、日々の学習を指導する教育力も持っている。このような家庭は中国にはいったいどのくらいあるだろうか。

学力とゆとりの両立は可能なのか

さて、またココちゃんママの悩みに戻ろう。厳格だが「学力世界」の中国の教育を取るか、それとも若干学力を犠牲にしてもゆとりと成長できる日本の教育を取るのか。学力とゆとりを両立できるところは果たしてあ

大学進学コースの普通高校、あるいは職業系高校に振り分けられる。二〇一二年、職業系高校の進学者数は高校進学者数全体の四三%を占める六〇三万人にも達している。この人たちは、大学進学がチャンスがゼロではないが難度が高い(4)。このように学生が大学受験の関門に辿り着くまで、幾多の選抜と淘汰を経験しなければならぬ。

また、義務教育を含む各段階の教育においては、英才教育を実施する重点校制度を設けており、同じ学校内でも「重点クラス」と「普通クラス」といった学力別クラスを設置する学校が多い。その結果、熾烈な競争は、高校進学、大学進学の時だけでなく、幼児教育を含むすべての教育段階を席卷した。

なによりも、現在中国の子どもは一人っ子が多く、我が子が成功すれば家族全員の成功で、失敗すれば家族全員の失敗を意味しているから、失敗は絶対許せない。子どもの教育ならお金も労力も惜しまない。

ここまで書くと、読者の皆さんにはさぞ中国の子どもが努力せざるを得ない原因がお分かりいただけただろう。「小皇帝」、「小公主」とされる中国の子どもは生まれてからすでに一家の希望を一身に託された重い使命を

るのか。

答えはYESである。早いうちに重点学校(小中高)に入れば、学力とゆとりの両方が入手できる。中国でいわゆる重点学校とは最強の教師陣、最高の施設を備え、さらに最新の教学方法を駆使する実験学校、大学の付属学校のことを指す。義務教育に属するため、重点校は公的進学選抜は行わないが、独自の選抜を通して優秀者を集めている。子どもが重点校に入れたら、高い学力の教育は無論のこと、それ以外の才能を開花させる活動も充分に楽しめる。某名門大学付属小学校で学んでいる筆者の友人の子どもは、フィッシング、ロボット製作などの部活動に参加しており、海外との交流も日常的に行われているようだ。今後、飛び級で名門大学に進学するか、推薦で海外の名門大学に進学する可能性が十分想定できる。

もう一つの方法は海外進学を目指す国際学校に入ることである。学費が高額に上るために、進学できるのはほとんど富裕層の子どもに限っている。

要するに非凡な頭脳か潤沢な懐具合かのどちらかを持つていれば、中国の標準的選抜コースに乗らずに済むことができる。ただし、大部分の中国人にとって、これは

長い間、アフリカのウガンダは世界の最貧地域といわれてきた。しかし現在の首都カンバラにはビジネスビルや世界レベルのホテルが並び、車が行き来している。赤道直下の町だが、海拔一九〇メートルの高地にあり、平均気温が二三度。ビクトリア湖と隣接しているので過ごしやすく、急速に発展しているアフリカを象徴するような賑わいである。

車が行き来と書いたが、ウガンダで走っている車の九割以上は中古車、その多くが日本製の車である。ウガンダは車を生産できないので、中古車も全て輸入車であ

カンバラ(ウガンダの首都)と
キトウグム(筆者の住む北部の田舎町)

世界の子どもの今

ウガンダ

光と影の中にいる子どもたち

在ウガンダ：国際ボランティア
宮本宗一郎 みやもとそういちろう

る。それも、ケニアのモンバサに陸揚げされた車を陸路輸送してくるので値段が大変高い。

二〇一四年、ウガンダにおいて初めて労働調査が行われた。正規労働者の平均月収は二〇〇ドル、非正規労働者は四九ドルであった。日本円に換算して、正規労働者が約三万円、非正規が約五千円になるが、個人的な印象としては、平均賃金はもっと低い感じがする。そのため、中古車でも安くて三〇万円以上、しかも維持費・燃料の費用が高いので、中古でも自家用車を持っているのはごく一部の富裕層に限られる(正規労働者の割合は極めて少ない)。

ここまでは、首都カンバラの状況だが、私は現在、首都から五五〇キロメートル離れた北部の町キトウグム

まさに高嶺の花である。

場所を変えて日本のことを考えてみよう。日本の親たちも可能であれば、学力とゆとりの両方を求めたいであろう。中国と違い、日本社会は「結果的平等」に対して極めて神経を使うため、学校などでの順位付けを極力避けようとする傾向がある。その結果、公教育においては上の層を目指すよりも、下の層に合わせて教育を行う特徴があると筆者は見ている。それに対して、努力して差が生じるのは当たり前であり、上の層を目標にどんどん頑張るとの意識は中国の社会には広く存在する。

ココちゃんママの悩みはまだしばらくは続くが、この原稿を締め切った時点での決断は、日本の中学受験組の一員になって、日本の私立中学校の入学を目指すことである。これが果たして最善の選択だろうか。

一方、日本の小学校二年生のわが娘いっしんちゃんは、毎日の宿題の少なさに不完全燃焼を感じつつも、中国国内にいるとお友だちが学校に追われている生活に恐怖感も持っている。「日本はもうちょっと厳しく、中国はもうちょっとゆとりをもって」と子どもながらにいっしんちゃんはよく口にする。これは無論日本にいるこの中国人親の切なる願いでもある。

本論文を作成するにあたり、王毅氏、唐莉氏、王子心ちゃん(ココちゃん)より多大なご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

〈文献〉

- (1) ベネッセ教育総合研究所「学習基本調査・国際六都市調査」(http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakuhon_on_goshi/hon/hon_1_2.html、二〇一四年二月二〇日閲覧)
- (2) 中華人民共和国国家教育委員会令第一〇号「学校衛生工作条例」一九九〇年六月四日発布
- (3) 北京大学中国社会科学調査センター「中国報告・民生・二〇一〇・二〇一〇
- (4) 「中国教育統計年鑑」人民教育出版社、二〇一二年より算出
- (5) 李敏「中国の教育の現状と課題」『季刊中国』二〇一一年春季号
- (6) 李敏「中国の『教育熱』を解説する」『中央評論(特集 世界の教育熱)』中央大学、二〇一三
- (7) 藤田英典「教育改革」岩波新書、一九九七
- (8) 耳塚寛明「小学校学力格差に挑む——だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第八〇集、二〇〇七